



Title	染織技術の戦略的継承法 : インド, グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に
Author(s)	上羽, 陽子
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

染織技術の戦略的継承法

— インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に

上羽陽子／国立民族学博物館

1. はじめに

本発表は、ローカルな文脈で生産されてきた儀礼用布が、グローバルな市場にむけた観賞用へと変容する際に、どのような製作技術の改変が起きるのか、染色技術学の視点から明らかにすることを目的とする。さらに生産者がローカル市場とグローバル市場とのそれぞれの価値志向に対して、どのように対応しながら製作・販売をしているか考察を試みる。

本発表の調査地と調査対象は、インド西部グジャラート州アメダバードで製作される女神儀礼用染色布（マーターニーパチューデイ）である。この布は、同州のヒンドゥー教の下層カーストが女神儀礼を執り行う際に、聖なる空間を区切るための間仕切りや天蓋として使用されてきた。製作者は、画家や描く人を意味するチッタラと自称し、他者からはワグリと呼ばれる人びとである。

2. ローカル市場向けの女神儀礼用染色布

ローカル市場向けの女神儀礼用染色布の製作技術は、大量消費を目的として、シルクスクリーンをもちいた化学染料による捺染である。儀礼布はナヴァラートリと呼ばれる1年に2回ある女神儀礼で使用される。製作者は、中都市のローカルマーケットの小売商などへ儀礼布を販売する。儀礼布は使用后、川に流されるため、毎年、新しいものが必要となり、大量に消費される。また、使用者たちが直接、生産地を訪れて儀礼布を購入することもある。このとき、同行する女神儀礼の司祭者が中心となって、工房の在庫から父系外婚集団ごとに決まった女神の図像を見比べる。かれらは

日常生活にて女神へ子宝・治癒祈願などをおこなっており、儀礼の最大の目的は女神の力にあやかることである。そのため購入者は、儀礼布を選ぶ際、女神の表情など図像表現への強いこだわりをもっている。一方、かれらが、製作技術や染料・顔料の素材に関して興味を示すことはない。

3. グローバル市場向けの女神儀礼用染色布

グローバル市場向けの女神儀礼用染色布は、ローカル市場向けの布とは区別をして製作され、図像が細かく多色なことが特徴である。販売先は国内外の手工芸祭や、ギャラリーからの依頼、工房を訪れる観光客などである。本稿では女神儀礼で使用することを目的としない市場をグローバル市場と呼ぶ。

このような販路を確立した経緯には、チッタラの1人が1971年にインド政府のナショナル・アワードに選ばれたことが起因となっている。表彰者は、さまざまな手工芸祭に招待されるとともに、名前が公表されるため、商人をはじめギャラリーなど多方面から仕事の依頼を受ける機会が増える。観光客が生産地の工房を訪れることもあり、その際に注目すべきは、製作者チッタラの語りである。チッタラはヒンドゥー教の神話とともに女神の名前や、ローカルな人びとと女神信仰との密接な関わりについて詳細に繰り返し説明をする。染色布に興味があり、購入したいという意欲がある訪問者の購買意欲をかきたてているのだ。さらに、ここで重要なことは、グローバル市場において、この布の商品価値に、製作技術が含まれていることである。チッタラは

販売時に、この布が手描きであることや天然染色であることを強調し、それがわたしたちの伝統であると連呼する。

グローバル市場向けの製作技術の特徴は、媒染剤と染料を結合させる媒染染色の技術をもちいていることで、媒染には鉄漿と明礬、染料にはアントラキノン系化学染料アリザリンが使用されている。下染めや印捺のために粘度を高める助剤などには天然物を使用しているが、染色の要となる染料は化学染料をもちいており、販売時に強調していたような天然染色を実際にはおこなっていないのである。

4. 考 察

このような両市場向けの異なる製作技術は、どのような要因によるものであろうか。先行研究にてさかのぼることのできる製作技術は、1960年代から1980年代のものであるため、当時の技術と比較をし、考察を試みる。

当時の製作技術は、現在のグローバル市場向けの製作技術とほぼ同じである。ただし、当時は水洗や下染め、媒染染色など工程ごとに専門とする職能集団へ発注し、分業によって製作がおこなわれていた。そのため、当時のチッタラの作業は、布に鉄漿と明礬の媒染剤を置くのみであった。一方、現在のチッタラによるグローバル向けの製作技術は、職能集団に発注していた分業による作業工程を、一貫作業としてみずからでおこない、さらに、多色染色を加えているのである。

一貫作業となった理由は、化学染料の普及にある。当時は、化学染料の転換期であり、アリザリンの媒染染色に変わり、木綿素材に堅牢で、低温による浸染が可能なナフトール染料や、安価で作業の容易なプロシオン染料による捺染が主流となっていく。アリザリンの媒染染色は、高温煮沸による浸染のため、作業者の労働負荷が高かった。チッタラは、

労働負荷の軽い新たな化学染料を、自らの染色技術に取り入れることで、女神儀礼用染色布を大量生産することが可能になったと推察できる。そして、そこにローカルな使用者が好む極彩色による図像表現をアクリル顔料などで彩色するようになったのである。

その一方で、チッタラは、以前は職能集団へ発注していた製作技術を、自らで一貫作業をおこなうようになった。そして、販路を開拓したグローバル市場向けとして、一品ずつ少量生産するようになった。この時にザクロの皮やウコンの根などをもちいた天然染料による多色染色を製作技術に加えることで、自ら製作技術を天然染色によるものとして付加価値をつけているのである。

5. ま と め

チッタラによるグローバル市場向けの製作技術は、分業によって製作されてきた職能集団の工程に天然染色を加え、自らの製作技術として伝統性を主張している。グローバル市場向けの染色布は、実際には化学染料を多用する天然染色風であるにもかかわらず、ローカル市場向けの女神儀礼用染色布にローカルな文脈において儀礼的機能が喪失していないこととセットにして、グローバル市場での価値を保つ戦略を選択している。

一方で、ローカル市場向けの女神儀礼用染色布は、化学染料や化学顔料を使用し、1960年代から1980年代の染色技術は全く継承されていない。チッタラは、日々開発が進む染料や顔料を多用して、作業の省力化や一貫製作・大量生産を目指し、製作技術を改良し続け、それぞれの市場の価値志向を的確に察知しながら、製作技術と販売戦略を使い分けていることを本発表において指摘した。

*本研究はJSPS 科研費 JP26370122の助成を受けたものです。